令和　五　年度　（A日程）

四天王寺東中学校入学試験問題

国　語

注意　答はすべて解答用紙に書きなさい。
句読点も一字に数えます。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『小公女』は近代のお姫さま物語だと申しました。比較の対象としてもっともふさわしいのは『シンデレラ』でしょう。

おとぎ話の『シンデレラ』は屋根裏部屋の下女だった少女が急上昇して幸福をつかむ物語でした。『小公女』はお嬢さまだった少女が下女に急a カコウする物語です。『シンデレラ』では魔法の力でネズミが馬車を引く馬に変身しますが、馬車を奪われたセーラの屋根裏部屋には、ネズミの一家が住んでいた。まったく逆です。

しかし、両者のちがいはそこではありません。『シンデレラ』と『小公女』、さらに※敷衍して、おとぎ話と少女小説のちがいとは何でしょうか。

それは魔法使いが出てくるか否かです。

シンデレラがかぼちゃの馬車で舞踏会に行けたのは、超自然的な魔法使いの力ゆえでした。

A　姫たちはしかも、自ら行動を起こすのではなく、たまたま出会った王子に見そめられただけ。

B　『シンデレラ』といい『白雪姫』といい『眠り姫』といい、おとぎ話の王子ってものは、親の威光で食ってるくせに女を容姿で判断するような男ばかりです。

C　またシンデレラが幸福をつかんだのは、彼女の美貌に王子が一目惚れしたからです。

D　そしておとぎ話の姫の幸福とは、そんなろくでもない王子との結婚を意味していた。

ひるがえって『小公女』はどうか。一一歳にして人生のどん底に落ちたセーラはここから再び幸福への道を上りはじめます。『小公女』はV字回復型の物語なのです。

それは当初、①魔法のようなかたちでもたらされます。

寒さと空腹のなかで眠りについた夜、ふと目を覚ますと、暖炉の火が燃え、やかんの湯がわいていた。床には絨毯、暖炉の前にはクッションと椅子。テーブルには皿とティーセットがのり、ベッドには上掛けとb 羽毛を詰めたキルト。足もとには綿の入った絹のガウンとキルトのスリッパ。セーラはベッキーに興奮して伝えます。

〈私たちが眠っているあいだに、《魔法の精》が来て、魔法をかけていったの〉

魔法の仕掛人は、隣家の住人・ラムダスでした。姫を苦境から救ったという点で、このラムダスこそがセーラにとっての「王子さま」でしょう。しかしラムダスは隣家のカリスフォード家に仕えるインド人の召使いです。

ラムダスが飼っている猿が、屋根裏部屋の天窓からセーラの部屋に入ってきたのがキッカケで、二人は親しくなったのでした。そこで威力をc ハッキしたのは、セーラのものおじしない態度とインド時代に覚えたヒンドゥスターニー語でした。母語で話しかけられたラムダスは感激し、以後、セーラの行状を天窓を通して見守って

きたのです。

この挿話は、二つの意味で②おとぎ話を相対化します。

ひとつは、王子の役割を果たしたのが、ホンモノの王子とは真逆の異国から来た隣家の召使いであったことです。階級に疎いセーラは、疎い分、どんな相手にも偏見をもっていない。二人の間に成立したのは、階級も民族も超えた友情でした。

もうひとつは、この幸運が③セーラの資質によるものだったことです。ラムダスは病に伏せっている主のカリスフォード氏を励まそうと、隣家の変わった少女の話をしたのです。

〈あの子、ここの女主人の、悪魔のようなやつに、パリア（下層民）そっくりの扱い、受けてます。けれどその子のふるまい、王家の血筋、さながらです〉。〈私、あの子がとてもとても好きです。私たち、孤独な者同士だから〉

カリスフォード氏はおおいに興味をかきたてられます。こうしてスタートした、主と召使いの魔法プロジェクト。

心身の健康を取り戻していくなかで、セーラもそれが魔法の力ではなく、だれか見知らぬ人の好意であることを悟ります。〈この世界のどこかには、限りなくやさしい人がたしかにいて、しかもその人は私のお友達なんだ〉と。

一度目の幸福、すなわちセーラが金持ちの娘に生まれたのはたんなる偶然です。しかし、二度目の幸福は、彼女が［　④　］でつかんだものだった。

二度目の幸福も偶然がからんではいますが、ラムダスの心を動かし、カリスフォード氏の好奇心を刺激したのは、美貌でもガラスの靴に合う足でもなく、セーラの逆境に負けない強い意志と毅然とした態度だった。そしてラムダスとの交流のキッカケは、セーラが身につけていたヒンドゥスターニー語でした。自らを救うのは、志の高さと教養である、というメッセージを『小公女』は放ちます。王子に見そめられて結婚するという古くさいお姫さまの物語を、『小公女』は近代の物語につくりかえたのです。

〈中略〉

『小公女』には続編がないので、その後のセーラがどうなったかはわかりません。人生のどん底を少女時代に味わったこういう子は、政治家になるといいんじゃないかと私は思いますが、イギリスで女性参政権が実現したのは※ずっと後の話です。「戸主または戸主の妻である三〇歳以上の女性」の参政権が認められたのが一九一八年、二一歳以上を対象にした男女ｄビョウドウの普通選挙が実現したのは一九二八年です。そんな事情を考えると、成長後の彼女は児童福祉事業に情熱を傾けたのではないだろうか。

孤児に対する非人道的な扱いを告発した『オリバー・ツイスト』は、イギリス社会に衝撃を与えました。同じような飢餓と虐待を身をもって体験したセーラは、父から受け継いだ資産を貧困な子どもの救済に使おうと思ったはずです。それでたぶんいうんです。「だって私、おなかがすくってどういうことなのか、わかるんですもの」

父親が大好きだった以前のセーラは、(い)虚勢を張って「小さな奥さま」ぶっていた。寄宿学校でもプリンセス然とふるまっていた。でもそれは、しょせん家庭や寄宿学校という狭い世界での話です。父の死で社会に放り出されたセーラは、そこではじめて貧困の現実を知り、共生の大切さを学び、精神的に自立したのではなかったでしょうか。

想像の世界に生きていたセーラが、現実に目覚める象徴的なシーンがあります。人形のエミリーをセーラは親友と思い、苦しい胸の内を打ち明けてきた。しかし、嵐の中を空腹で戻ったある日、セーラの目にそれはただの(う)木偶の坊に見えた。セーラはエミリーを椅子から突き飛ばします。〈あんたなんか、ただの人形なんだわ！〉〈おがくずが詰まってるんだもの。心なんて、なかったのよ〉

もし『小公女』に「⑤少女時代からの卒業」という要素が組み込まれているとしたら、この瞬間でしょう。なにしろエミリーはただの親友ではない、大好きだった父親からの、かけがえのない贈り物だったのですから。

こうして彼女は、自分だけの想像の世界から脱皮し、外に目をむけるようになっていく。甘い父親の庇護下にいたら、こうはならなかったでしょう。プチ大奥みたいな女子寄宿学園のスターでいても、こうはならなかったはずです。屋根裏部屋での経験、セーラにとってのイニシエーションはけっして無駄ではなかった。

彼女の王女さま然としたものごしや、可愛げのない言動や、過剰なプライドは一生変わらないかもしれません。しかし、魔法の力を借りなくても、人の力で道は開ける、美貌の力で男に選ばれるだけが物語の上がりではないと、『小公女』は主張します。⑥と決別したところから、物語は、いや人生ははじまるのです。

（斎藤美奈子『挑発する少女小説』より・一部改）

語句注

※敷衍して…話を広げて。

※ずっと後の話…『小公女』が刊行されたのは一九〇五年。

問1　線a～dのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問2　線(あ)～(う)の意味として最も適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

(あ)
ア　反対に　　イ　要するに　　ウ　たとえば　　エ　あるいは

(い)
ア　うそをついて　　イ　大声を出して
ウ　うわべだけいばって　　エ　その場をとりつくろって

(う)
ア　かわいいもの　　イ　みにくいもの
ウ　腹が立つもの　　エ　役に立たないもの

問３　本文中の［　　］内のＡ～Ｄを適切な順番に並べ替えなさい。

問４　――線①「魔法のようなかたち」とありますが、なぜそのように言うのですか。理由として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ラムダスは召使いであり、そのような人を王子さまとは認めたくなかったから。

イ　セーラは一一歳にして人生のどん底に落ちたのに、再びＶ字回復することができたから。

ウ　隣に住むラムダスはふしぎな人で、セーラにとって魔法使いのように思えたから。

エ　自分が知らないうちに部屋の中が豪華（ごうか）になっていて、その原因がわからなかったから。

問５　――線②「おとぎ話を相対化します」とはどういうことですか。説明として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　幼い少女が成長して王子さまや魔法使いを信じなくなるということ。

イ　王子と少女との間に階級や民族を超えた友情が成立したということ。

ウ　古い考え方の物語を今の時代に合う物語につくりかえたということ。

エ　偶然のできごとではなく人は確かな理由によって幸福になるということ。

問６　――線③「セーラの資質」とは何ですか。本文中から七字で抜き出しなさい。

問７　空らん［④］に入るのに適当な語句を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自力　　イ　幸運　　ウ　運命　　エ　魔法

問８　――線⑤「少女時代からの卒業」とは、どうすることですか。「想像」「現実」の二語を使って三十字以内で説明しなさい。

問９　空らん［⑥］に入るのに適当な語句を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　男　　イ　学校　　ウ　魔法使い　　エ　屋根裏部屋

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある春の日、犬の「白」は、隣の家の飼い犬の「黒」が犬殺しに狙われているところに出くわす。助けを求めて泣き叫ぶ黒を助けたいと思いながらも、白は臆病になり、その場から逃げ出してしまう。その後、白は主人の家に帰るが、主人であるお嬢さんにも坊ちゃんにも白であると気付いてもらえない。そして、二人の会話から、白は自分の体が真っ黒になっていることを知る。二人は黒くなった白を見知らぬ狂犬だと思いこみ、追い払ってしまうのであった。

お嬢さんや坊ちゃんに逐い出された白は東京中をうろうろ歩きました。しかし何処へどうしても、忘れることの出来ないのはまっ黒になった姿のことです。白は客の顔を映している理髪店の鏡を恐れました。雨上りの空を映している往来の水たまりを恐れました。往来の若葉を映している飾り窓の硝子を恐れました。いや、カフェのテエブルに黒ビイルを湛えているコップさえ、――けれどもそれが何になりましょう？　あの自動車を御覧なさい。ええ、あの公園の外にとまった、大きい黒塗りの自動車です。漆を光らせた自動車の車体は今こちらへ歩いて来る白の姿を映しました。――はっきりと、鏡のように。白の姿を映すものはあの客待ちの自動車のように、至るところにある訳なのです。もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう。それ、白の顔を御覧なさい。　白は苦しそうに唸ったと思うと、忽ち公園の中へ駈けこみました。

公園の中には鈴懸の若葉にかすかな風が渡っています。白は頭を垂れたなり、木木の間を歩いて行きました。此処には幸い池の外には、姿を映すものも見当りません。物音は唯白薔薇に群れる蜂の声が聞えるばかりです。白は平和な公園の空気に、少時は醜い黒犬になった日ごろの悲しさも忘れていました。

しかし①そういう幸福さえ五分と続いたかどうかわかりません。　白は唯夢のように、ベンチの並んでいる路ばたへ出ました。するとその路の曲り角の向うにけたたましい犬の声が起ったのです。

「きゃん。きゃん。助けてくれえ！　きゃあん！　きゃあん。助けてくれえ！」

白は思わず身震いをしました。この声は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はっきり浮ばせたのです。白は目をつぶったまま、元来た方へ逃げ出そうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の間のことです。白は凄まじい唸り声を洩らすと、［　②　］またふり返りました。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！　きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

この声はまた白の耳にはこういう言葉にも聞えるのです。

「きゃあん。きゃあん。臆病ものになるな！　きゃあん。臆病ものになるな！」

白は頭を低めるが早いか、声のする方へ駈け出しました。

けれども其処へ来て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しなどではありません。唯学校の帰りらしい、洋服を着た子供が二、三人、頸のまわりへ縄をつけた茶色の仔犬を引きずりながら、何かわいわい騒いでいるのです。仔犬は一生懸命に引きずられまいともがきもがき、「助けてくれえ」と繰り返していました。しかし子供たちはそんな声に耳を借すけしきもありません。唯笑ったり、怒鳴ったり、あるいはまた仔犬の腹を靴で蹴ったりするばかりです。

白は少しもためらわずに、子供たちを目がけて吠えかかりました。不意を打たれた子供たちはA驚いたの驚かないのではありません。また実際白の容子は火のように燃えた眼の色といい、刃物のようにむき出した牙の列といい、今にも噛みつくかと思う位、恐しいB剣幕を見せているのです。子供たちは四方へ逃げ散りました。中には余り狼狽したはずみに、路ばたの花壇へ飛びこんだのもあります。白は二、三間追いかけた後、くるりと仔犬をふり返ると、叱るようにこう声をかけました。

「さあ、俺と一しょに来い。お前の家まで送ってやるから。」

白は元来た木木の間へ、まっしぐらにまた駈けこみました。茶色の仔犬も嬉しそうに、ベンチをくぐり、薔薇を蹴散らし白に負けまいと走って来ます。まだ頸にぶら下った、長い縄をひきずりながら。

二、三時間たった後、白は貧しいカフェの前に茶色の仔犬と佇んでいました。昼も薄暗いカフェの中にはもう赤あかと電燈がともり、音のかすれた蓄音機は浪花節か何かやっているようです。仔犬は得意そうに尾を振りながら、こう白へ話しかけました。

「僕は此処に住んでいるのです。この大正軒というカフェの中に。――おじさんは何処に住んでいるのです？」

「おじさんかい？　おじさんは――ずっと遠い町にいる。」

白は淋しそうに③ため息をしました。

「じゃもうおじさんはうちへ帰ろう。」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？　なぜまたそんなことを尋ねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜は此処に泊って行って下さい。それから僕のお母さんにも命拾いの御礼をいわせて下さい。僕の家には牛乳だの、カレエ、ライスだの、ビフテキだの、いろいろな御馳走があるのです。」

「ありがとう。ありがとう。だがおじさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。――じゃお前のお母さんによろしく。」

白はちょいと空を見てから、静かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフェの屋根のはずれに、三日月もそろそろ光り出しています。

「おじさん。おじさん。おじさんといえば！」

仔犬は悲しそうに鼻を鳴らしました。

「じゃ名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンというのです。ナポちゃんだのナポ公だのともいわれますけれども。――おじさんの名前は何というのです？」

「おじさんの名前は白というのだよ。」

「白――ですか？　白というのは不思議ですね。おじさんは何処も黒いじゃありませんか？」

④白は胸が一ぱいになりました。

「それでも白というのだよ。」

「じゃ白のおじさんといいましょう。白のおじさん。是非また近い内に一度来て下さい。」

「じゃナポ公、さようなら！」

「御機嫌好う、白のおじさん！　さようなら、さようなら！」

その後の白はどうなったか？――それは一一話さずとも、いろいろの新聞に伝えられています。大かたどなたも御存知でしょう。度々危い人命を救った、勇ましい一匹の黒犬のあるのを。また一時『義犬』という※活動写真の流行したことを。あの黒犬こそ白だったのです。しかしまだ不幸にも御存知のない方があれば、どうか⑤下に引用した新聞の記事を読んで下さい。

《中略》

時事新報　十三日(九月)の名古屋市の大火は焼死者十余名に及んだが、横関名古屋市長なども愛児を失おうとした一人である。令息武矩(三歳)は如何なる家族の手落ちからか、猛火の中の二階に残され、既に灰燼となろうとしたところを、一匹の黒犬のために啣え出された。市長は今後名古屋市に限り、野犬撲殺を禁ずるといっている。

読売新聞　小田原町城内公園に連日の人気を集めていた宮城巡回動物園のシベリア産大狼は二十五日(十月)午後二時ごろ、突然厳畳な檻を破り、木戸番二名を負傷させた後、箱根方面へ逸走した。小田原署はそのために非常動員を行い、全町にわたる警戒線を布いた。すると午後四時半ごろ、右の狼は十字町に現れ、一匹の黒犬と噛み合いを始めた。黒犬は悪戦頗る努め、遂に敵を噛み伏せるに至った。其処へ警戒中の巡査も駈けつけ、直ちに狼を銃殺した。この狼はルプス・ジガンティクスと称し、最も兇猛な種属であるという。なお宮城動物園主は狼の銃殺を不当とし、小

田原署長を相手どった告訴を起すといきまいている。

或秋の真夜中です。⑥体も心も疲れ切った白は主人の家へ帰って来ました。勿論お嬢さんや坊ちゃんはとうに床へはいっています。いや、今は誰一人起きているものもありますまい。ひっそりした裏庭の芝生の上にも、唯高い棕櫚の木の梢に白い月が一輪浮んでいるだけです。白は昔の犬小屋の前に、露に濡れた体を休めました。それから寂しい月を相手に、こういう独り語を始めました。

「お月様！　お月様！　わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまっ黒になったのも、大かたそのせいかと思っています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れ申してから、あらゆる危険と戦って来ました。それは一つには何かの拍子に煤よりも黒い体を見ると、臆病を恥じる気が起ったからです。けれどもしまいには黒いのがいやさに、――この黒いわたしを殺したさに、あるいは火の中へ飛びこんだり、あるいはまた狼と戦ったりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪われません。死もわたしの顔を見ると、何処かへ逃げ去ってしまうのです。わたしはとうとう苦しさの余り、自殺をしようと決心しました。唯自殺をするにつけても、唯一目会いたいのは可哀がって下すった御主人です。勿論お嬢さんや坊ちゃんはあしたにもわたしの姿を見ると、きっとまた野良犬と思うでしょう。ことによれば坊ちゃんのバットに打ち殺されてしまうかも知れません。しかしそれでも本望です。お月様！　お月様！　わたしは御主人の顔を見る外に、何も願うことはありません。そのために今夜ははるばるともう一度此処へ帰って来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会わして下さい。」

白は独り語をいい終ると、芝生に顎をさしのべたなり、何時かぐっすり寝入ってしまいました。

「驚いたわねえ、春夫さん。」

「どうしたんだろう？　姉さん。」

白は小さい主人の声に、はっと目を開きました。見ればお嬢さんや坊ちゃんは犬小屋の前に佇んだまま、不思議そうに顔を見合せています。白は一度挙げた目をまた芝の上へ伏せてしまいました。お嬢さんや坊ちゃんは白がまっ黒に変った時にも、やはり今のように驚いたものです。あの時の悲しさを考えると、――白は今では帰って来たことを後悔する気さえ起しました。するとその途端です。坊ちゃんは突然飛び上ると、大声にこう叫びました。

「お父さん！　お母さん！　白がまた帰って来ましたよ！」

白が！　白は思わず飛び起きました。すると逃げるとでも思ったのでしょう。お嬢さんは両手を延ばしながら、しっかり白の頸を抑えました。同時に白はお嬢さん

の目へ、じっと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳（ひとみ）にありありと犬小屋が映っています。高い棕櫚の木のかげになったクリイム色の犬小屋が、――そんなことは当然に違いありません。しかしその犬小屋の前には米粒（こめつぶ）ほどの小ささに、

［　⑦　］犬が一匹坐（すわ）っているのです。清らかに、ほっそりと。――白は唯C恍惚（こうこつ）とこの犬の姿に見入りました。

「あら、⑧白は泣いているわよ。」

お嬢さんは白を抱きしめたまま、坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは――御覧なさい、⑨坊ちゃんの威張っているのを！

「へっ、姉さんだって泣いているくせに！」

（芥川龍之介『白』より）

語句注

※活動写真……映画。

問1　〰〰線A・B・Cの言葉の意味として適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

A
ア　全く驚かなかったということ。
イ　少し驚きかけたということ。
ウ　ひどく驚いたということ。

B
ア　怒りで興奮している様子。
イ　気力をなくしている様子。
ウ　冷静で落ち着いている様子。

C
ア　おずおずと。
イ　うっとりと。
ウ　しげしげと。

問2　――線①「そういう幸福」とは、誰の、どのような状態を指していますか。三十字以内で説明しなさい。

問3　空らん［　②　］に入る言葉として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　おっかなびっくり　　イ　きりりと
ウ　もじもじと　　エ　しょんぼり

問4　──線③「ため息をしました」とありますが、ここでの白の気持ちを説明したものとして適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　仔犬がしつこく自分の家に寄って行くように言うので、うっとうしく思っている。

イ　いろいろな御馳走があるカフェで飼われているという仔犬を、うらやましく思っている。

ウ　住んでいる場所を聞かれても、家を追い出されたために答えようがないと思い、いらだっている。

エ　自分にはもう帰る所がないということを改めて突きつけられたように思い、切ない気持ちになっている。

問5　──線④「白は胸が一ぱいになりました」とありますが、ここでの白の心の声として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　そうか！　どうせなら名前を「黒」とかうそをついておけばよかったな。

イ　いちいち理屈っぽいやつだなあ！　本当にうっとうしい限りだよ。

ウ　たのむ！　おれだってつらいんだから、そのことに触れないでくれ。

エ　やっぱり！　今のおれについては、みんな当然そこを疑問に思うよな。

問6　──線⑤「下に引用した新聞の記事」とありますが、これらの記事にあるような行動を白がとったのはなぜですか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の行動が新聞にのったり映画になったりすれば、お嬢さんと坊ちゃんが自分にやさしくしてくれると思ったから。

イ　苦しさのあまり自殺をしたくなり、火の中に飛びこんだり狼と戦ったりして、あらゆる危険と戦ってきたから。

ウ　正しい行動をしないと、飼い主である坊ちゃんからバットで打ち殺されるかもしれないと思ったから。

エ　自分の勇気のなさを恥ずかしく思うとともに、自分の姿がいやで死んでしまいたいと思ったから。

問7　──線⑥「体も心も疲れ切った白」とありますが、この時の白の心情が反映していると考えられる表現を、本文中の同じ形式段落から四字でぬき出しなさい。

問８　空らん［⑦］に入る、白の状態を表す言葉として適当なものを考えてなさい。

ア　反省　　イ　感動　　ウ　後悔　　エ　衝撃　　オ　激怒

問９　――線⑧「白は泣いているわよ」とありますが、この時の白の気持ちを説明したものとして適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　姉と同様に飼い犬の帰宅はうれしいが、泣いて迎えても、その喜びは犬には分からないのにと思って、泣いている姉を見下している。

イ　姉と同様に飼い犬の帰宅はうれしくて、本当は大笑いしたいが、姉が泣いているため、空気を読まねばならず、めんどうだと感じている。

ウ　姉と同様に飼い犬の帰宅はうれしいが、泣くのは格好悪いことだと思って泣かないでいる自分を、泣いている姉よりも心が強いと思っている。

エ　姉と同様に飼い犬の帰宅はうれしいが、白が泣いているのを指摘する姉も泣いているのを見て、どちらもこれぐらいのことでおおげさだと感じている。

問10　――線⑨「坊ちゃんの威張っている」とありますが、この時の坊ちゃんの気持ちを説明したものとして適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

三　次のうち、意味内容が他と異なるものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①　ア　かっぱの川流れ　　イ　仏の顔も三度まで
　　ウ　弘法(こうぼう)にも筆のあやまり　　エ　さるも木から落ちる

②　ア　すずめの涙　　イ　猫に小判
　　ウ　ぶたに真珠(しんじゅ)　　エ　馬の耳に念仏

③　ア　以心伝心　　イ　阿吽(あうん)の呼吸
　　ウ　どんぐりの背比べ　　エ　馬が合う

④　ア　雨だれ石を穿(うが)つ　　イ　ローマは一日にしてならず
　　ウ　五十歩百歩　　エ　石の上にも三年

⑤　ア　腰を抜かす　　イ　うしろ髪(がみ)を引かれる
　　ウ　肝(きも)をつぶす　　エ　息をのむ

⑥　ア　腹を決める　　イ　清水(きよみず)の舞台から飛び降りる
　　ウ　一念発起(ほっき)　　エ　首をつっこむ

⑦　ア　大きな顔をする　　イ　揚(あ)げ足を取る
　　ウ　図に乗る　　エ　天狗(てんぐ)になる

⑧　ア　足が棒(ぼう)になる　　イ　首を長くする
　　ウ　指折り数える　　エ　一日千秋(いちじつせんしゅう)

⑨　ア　馬脚(ばきゃく)をあらわす　　イ　のどから手が出る
　　ウ　化けの皮がはがれる　　エ　しっぽを出す

⑩　ア　一杯食わされる　　イ　長いものに巻かれる
　　ウ　煮え湯を飲まされる　　エ　飼い犬に手をかまれる